様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５　年　３　月　３１　日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2010 年度　～2012 年度
課題番号：22520181
研究課題名（和文）　志賀直哉に師事した池田小菊の戦中戦後―奈良・文学・政治―

研究課題名（英文）　A Study of Ikeda Kogiku, a Shiga Naoya's disciple, and Her War Years-Nara, Literature, and Politics

研究代表者　吉川　仁子　（YOSHIKAWA Hitoko）
奈良女子大学・人文科学系・講師
研究者番号：90243352

研究成果の概要（和文）：本研究は、志賀直哉（大正 14 年から昭和 13 年にかけて奈良に居住）に師事した、池田小菊を中心とした研究である。彼女が関わった、昭和初期から戦後にかけての関西の出版や女性作家たち、及び、戦後民主主義の出発期について検討した。
　彼女の草稿の内容の検討を通して、奈良在住時の志賀や当時の奈良の一面を明らかにできた。また、全国書房版女流作家叢書についての調査によって、叢書出版において小菊の果たした役割や、当時の女性作家のネットワークの一端が明らかになった。
　小菊の資料のうち、戦時下の検閲についての資料となりうるゲラ刷りや、小菊が戦後関わった婦人会活動の機関誌である『婦人奈良』などを画像データ化した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on IKEDA Kogiku, a disciple of SHIGA Naoya, who lived in Nara from Taisho 14 to Showa 13, and examines the publishing industry and publications in Kansai and women writers from early Showa to the postwar period, and the beginning of postwar democracy.
　My analysis of her manuscripts illuminates one aspect of Shiga Naoya during his stay in Nara and Nara in the war years.　By investigating "Women Writer's Series" published by the Zenkoku-shobo, I demonstrate how the network of women writers functioned and the role Ikeda played in publishing the series.
　This study also includes digitalized images of Ikeda's materials, such as galley proofs, which can tell us about censorship during the war, and magazine *Fujin-Nara* (*Women Nara*), a bulletin of the women's society, which Ikeda was involved in.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学、近・現代文学、池田小菊、志賀直哉、奈良、全国書房、女流作家叢書

１．研究開始当初の背景

奈良女子大学の附属図書館は、平成 16 年 7 月に、作家であり池田小菊の研究者でもある武田好昭氏（筆名生田幸平、生駒市在住）から、池田小菊関係の資料の保管を依頼された。

それを端緒とし、武田氏の業績『評伝　池田小菊』（昭和 58 年発行）や、昭和 48 年５月の「関西文学」の「池田小菊特集号」などに導かれつつ、小菊の資料の整理、調査を行った。平成 17 年から２年間にわたって科学研究費補助金　基盤研究（C）「志賀直哉を中心とする奈良の文学空間の形成についての研究」（研究代表者：弦巻克二、分担者：吉川仁子）を受け、調査研究を行ない、それは、小菊が師事した志賀直哉に関するいくつかの資料・事項の発見へと実を結んだ。さらにこの研究を踏まえて弦巻により志賀の奈良での交友関係が明らかにされることとなった。志賀の奈良における交友は小菊の交友とももちろん交差しており、このような志賀直哉研究へのいくつかの貢献は、小菊資料なくしては、不可能であったと言ってもよい。小菊は多くの草稿、日記類を残しており、志賀研究への同様の貢献は、さらなる小菊資料の研究・調査によって可能であると考えるに至った。

また、小菊は、教育者、作家、婦人活動家という三つの側面を持ち、志賀の門下ということを超える独自の存在として新たに取り上げるべき人物であると言える。日本近代文学における女性作家の研究は、ジェンダー研究の隆盛とともに盛んになり、樋口一葉など研究の蓄積のある女性作家の作品の読み直しや、『青鞜』についての検討、また、これまであまり注目されて来なかった作家の再検討がなされてきた。しかし、女性文学研究には、充実の度合いを高めていくべき点が、まだ多く残されており、小菊も現在ではあまり知られていないが、再検討されるべき作家の一人であろう。今現在も、小菊の作品をまとめて読むことは難しい状況であるが、資料の整理調査、及び検討を進め、いずれ小菊の著作物をまとめた形で刊行することをも長期的視野に入れて研究をすべきであると判断した。

彼女についての研究の進展が、当時の関西の文壇状況、出版状況、女性作家の交流のありよう、さらには、戦後民主主義の出発期の社会状況を浮かび上がらせることにつながると確信し、本研究は計画された。

２、研究の目的

本研究では、志賀直哉（大正 14 年から昭和 13 年にかけて奈良に居住）に師事した池田小菊について、彼女が主に作品を発表した昭和初期から戦後にかけての、彼女の活動を明らかにすることを目的とした。

教育者として、小説家として、さらに戦後は婦人活動家として生きた小菊の残した多くの未発表原稿や日記などの一次資料は、新しい「学習法」実践の場のとしての奈良の実態や、奈良在住時代の志賀直哉、並びに彼と交流した奈良の人々の文化意識、さらに関西の出版事情や戦後の婦人活動の政治的問題点などを窺わせる、貴重な資料である。志賀の弟子として、主として私小説的観点から創作した小菊作品故に、彼女の未発表原稿には既発表作品では窺い知れぬ戦前の教育界の動向や、戦中の出版事情など色々な背景までが含まれているからである。以上のような、小菊の一次資料の豊かな可能性を踏まえて、本研究においては、主に戦中戦後の小菊の活動を精査することをとおして、全国書房との関わりなど当時の関西の文壇状況、及び当時の女性文学者の動向、また、小菊自らが体験した、奈良を舞台とする婦人会活動の政治的混乱を文学にどのように結実させようとしたか、等の点を検討することを目的とした。また、あわせて、貴重な資料の保存と、将来的には公開も視野に入れ、資料をデジタルデータ化することも目指した。

３．研究の方法

研究目的を達成するにあたっては、まずは一次資料の整理分類を十分に行うことが必要である。そして、その内容を分析するための方法としては、当時の文芸雑誌等の同時代資料や文献の博捜による調査研究が主たるものとなる。以下のような方法で進めた。

まず、基礎となる小菊資料の十分な整理を目標とし、未発表自筆原稿の調査をし、執筆年次の確定などの解説作業を行なうことを目指す。既発表作品で原稿があるものについては原稿を翻刻する。未発表原稿の執筆年代の確定などは、原稿用紙の種類や原稿の内容に時期を確定するヒントがあれば、それの調査をすることが求められ、新聞記事・文献の博捜が必要である。小菊の作品初出誌等、戦前の雑誌は、復刻・マイクロ化されているものについては、それを購入して活用する。

次に、小菊の作品を対象に戦時下の文学状況の考察を進めるために、作家としての小菊の確立期に関わった全国書房とのつながりについての調査をする。そのために、小菊の「雑記」等の記述を精査し、さらに、全国書房の出版の状況を各種データベース、出版目録などから調べ、また、全国書房と関わりのあった作家の側からの言及については各作家の著作、書簡等にあたって調べる。特に全国書房の女流作家叢書刊行期、及びそれに関わった女性作家について精査し、女流作家叢書の意義について考察する。そのために、日本近代文学館所蔵の「池田小菊書簡コレクション」の調査をする。同じく、戦時下の活動を知るため、小菊資料の中の、発禁処分にな

った作品のゲラ刷りの調査をする。
戦後の婦人活動家としての小菊の文筆活動について、奈良県婦人協議会の雑誌『婦人奈良』の精査をし、「暴力手帖」の成立プロセスを考察する。そのために当時の新聞資料などを活用して調査をする。
以上のような方針・方法で研究を進めた。

４．研究成果

（１） 未発表原稿の翻刻・解説

まず、一次資料の整理・調査の一環として、未発表原稿の翻刻と解説を付す作業を「思はぬ旅」という作品について行なった（雑誌論文② 吉川仁子・弦巻克二「池田小菊未発表原稿「思はぬ旅」」『りずむ』創刊号 2012 年 3 月 17p-51ｐ）。
この作品は昭和 16 年の始めに執筆されたと推定される未完の作品である。執筆時と同じ頃を作品内現在とし、小菊自身に重なると思われる人物を主人公として身辺に取材した私小説である。作品の中に、小菊が志賀のもとを初めて訪れた頃の回想を素材としてつづったもう一つの作品を配置した、いわゆる入れ子の構造を取っている。
執筆時と重なる作品内現在は、太平洋戦争直前である。奈良では、志賀が奈良を去る昭和 13 年に、「若草山山麓自動車道」の新設が問題になり、反対運動も起こったが実を結ばず、13 年 11 月着工、14 年 3 月に完成した。志賀も反対署名をしたその道をたまたま通り、小菊と重なる主人公が「気に入る」ところから作品は始まり、環境をめぐる当時の問題を垣間見ることもできるが、日中戦争が長引き、前年には皇紀二千六百年があり、ラジオの講演の調子などへの言及から全体主義の拡大への緊張感が窺える。また、大政翼賛会への微かな期待も語られている。
回想を描いた作品内の作品は「柳茶屋」と題され、小菊が奈良女子高等師範学校附属小学校訓導であった時代に小説「帰る日」を朝日新聞に連載し話題になったこと、志賀の家を訪れるようになった経緯、志賀の妻康子の印象、教育実習生とのやり取りの中での志賀作品批判などが書かれている。
この作品を通して、戦時下の様子とともに、志賀の奈良在住時の一面を知ることができる。また、志賀と小菊が師弟ではあっても、他の志賀門下とは異なる距離感を持っていることを窺わせる。志賀を無条件に肯定するということはなく、ことある毎に志賀と自己との縁を確認し続ける小菊の姿勢が現れた作品として、未発表だが重要な作品であることを確認した。

（２） 全国書房との関わりと、女流作家叢書の成立

次に、小菊と全国書房の関わりについて調査し、特に全国書房版女流作家叢書の成立について明らかにした。
全国書房は関西の書店で、雑誌『新文学』を発行したほか、戦前から出版活動を行っている。まず、国立国会図書館サーチ、CiNii Books の検索や、『出版年鑑』、古書店のデータベースなどの調査によって、全国書房は昭和 16 年から書籍の刊行を開始したものと判断した。全国書房の社主田中秀吉は、かつて朝日新聞紙上に連載された「帰る日」の作者としての小菊を覚えており、彼女を全国書房の顧問格として迎え、出版のアドバイスを仰いだとされる。昭和 16 年から刊行され始めた女流作家叢書は、全国書房草創期の文学作品出版のさきがけとして手がけられた事業と言ってよいだろう。小菊は、自らも原稿を執筆するとともに、叢書の執筆者の選定のための上京、執筆者との書簡での度々のやり取りなど、叢書出版のため精力を尽くした。
叢書は１池田小菊『来年の春』（装幀：荒井龍男、以下、括弧内装幀者）、２網野菊『若い日』（若山為三）、３中里恒子『家庭』（仲田菊代）、４壺井栄『石』（國枝金三）、５窪川稲子『気づかざりき』（飯島貞子）、６真杉静枝『母と妻』（青山二郎）の６冊からなる。本学に資料を寄託された武田好昭氏が、日本近代文学館に寄贈された「池田小菊書簡コレクション」には、真杉静枝、中里恒子、網野菊、壷井栄、窪川稲子らが小菊に宛てた書簡が含まれる。これらの多くは、女流作家叢書の出版に関するやりとりである。これらの書簡類と、本学所蔵の小菊の手帳類の内容を検討し、女性作家間の動向とネットワークを考察したところ、そこには、関西の新しい書店への信用度の低さと、関西在住の小菊の文壇における不利が浮かび上がって来た。
叢書の成立に関わるやりとりが、全国書房と小菊の地方性を浮き彫りにする一方で、執筆者たちの書簡からは、戦時下でものを書くことの緊張と、自分の本へのこだわりがはっきりと読み取れる。叢書の書誌事項を調査し、各本の装幀者についても調査をした。執筆者の過半は、装幀者を自分で選定している。装幀者の多くは名をなした（後に名を成す）画家、装幀家であり、各著者の本作りへの意気込みが窺えるとともに、文学と美術との関連について今後興味深い問題でもある。
以上の調査研究の結果、全国書房の草創期、女流作家叢書の書誌と成立、当時の女性作家間のネットワークと、小菊の位置などが解明できた。この成果は、雑誌論文①「池田小菊と全国書房版女流作家叢書」（『叙説（奈良女子大学）』大学・研究所紀要　単著　40 号 2013/03）に活字化した。

（３）　小菊の戦時下の文学活動

前項（２）の調査においても創作活動において戦時下であることを意識せざるを得ない緊張が叢書執筆者たちの書簡から窺えたが、小菊の作品においても、戦時下の意識を窺わせる作品がある。

昭和 15 年４月、『文藝』に発表された「甥の歸還」は、昭和 18 年９月の小菊の作品集『奈良』に所収、その再版の昭和 21 年 10 月本『奈良』では「鹿造夫婦」と改題される。小菊の甥の大西鹿一をモデルとし、彼の応召を素材とした作品である。

「甥の歸還」にはさらに前身があり、それは、昭和 14 年夏に執筆し「改造」に掲載予定だったがゲラの段階で発禁処分になっていた「身中の蟲」（後、「特務兵の甥」と改題）というものであった。小菊は、この「身中の蟲」を『奈良』の初版にも収めるつもりがあったことが、初版用の昭和 18 年６月 17 日付再校ゲラで確認できるが、以前発禁になっている作品ということで結果的に収録されなかったようである。

「甥の歸還」は、戦中の「文藝」、『奈良』初版、戦後の再版『奈良』所収時に改題された「鹿造夫婦」と、三つの本文を持ち、それらを比較してみると、戦後には削除された体制的な表現が、戦前の本文には見られることがわかった。

「身中の蟲」から「甥の歸還」、そして、「甥の歸還」の戦中と戦後の本文の比較は、戦時下の言論統制への意識を垣間見ることのできる資料である。この考察はまだ活字化できていない。発禁になったゲラはスキャンニングして、画像データ化を済ませている。

（４）　資料の画像データ化

前項（３）で触れた発禁のゲラなど、戦中戦後の小菊資料は、紙の劣化が著しいため、画像データ化を行った。

小菊の自筆原稿や「日記」・「雑記」等の一次資料のうち約 30 点について画像データ化作業を進めた。

また、小菊が戦後、奈良県婦人協議会の会長に就任し、その活動の中で発行した機関誌『婦人奈良』14 冊も画像データ化した。『婦人奈良』は、機関誌とはいえ、表紙を杉本健が描き、冒頭に入江泰吉の写真を掲げ、挿絵にも須田剋太や、奈良師範教授の久保田忠和の絵を入れ、小菊の小説や佐多稲子の小説、童話も載せるなど、一家団欒の話題を提供すべく工夫され、品位のある雑誌であった。また、戦後民主主義出発期の地方女性のありようを窺うことのできる貴重な資料である。今後ネットで公開する方向を探りたい。

（５）　小菊の戦後の活動

戦後の小菊が婦人会活動の中で体験した県知事との確執を書き残した「暴力手帖」という未発表作品は、戦後婦人の自立を啓蒙していく小菊の苦悩や、戦後の婦人参政権にも絡んだ様々な政治的要素が垣間見られる興味深い作品である。自筆原稿や関連する新聞記事の整理はすんでいるが、考察をまとめることができなかった。また、小菊の作品が私小説であるという性質上、慎重に考察を進めていくことが必要である。

前項（４）で触れた雑誌『婦人奈良』についても同様であり、戦後の資料データの公開については、慎重に配慮しつつ、公開の可能性を引き続き今後も検討していきたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 吉川仁子「池田小菊と全国書房版女流作家叢書」『叙説（奈良女子大学）』 査読無 40 号 221-236 2013/03

機関リポジトリ

http://hdl.handle.net/10935/3376

② 吉川仁子　弦巻克二「池田小菊未発表原稿「思はぬ旅」」 『りずむ』 査読無 創刊号　17-51　2012/03

６．研究組織

(1)研究代表者

吉川　仁子（YOSHIKAWA HITOKO）

奈良女子大学・研究院・人文科学系・講師

研究者番号：90243352

(2)研究分担者（22 年度）

弦巻　克二（THURUMAKI　KATSUJI）

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：40217394